

幼稚園教育の積極性

消極的教育といふ語がある。自然派の教育論者によつて屢々用ゐられる。其の意味は、兒童は自

己の自然の發達性を有する。教育はその天賦の發達を存分に發輝させるのが第一の任務である。故に教育は兒童の自然の發達性を尊重して、敢て之れを妨げ、冒すことなき様、慎重なる態度を執らなければならぬ。徒に與へんとし、濫に教へんとするは、此の意義に逆らふものである。極言すれば、自然に對する冒瀆である。少くも餘計のことである。といふのである。尤も、教育一般に亘つて之れ程あからさまに此の考へを述べるものは多くはない。先づルソー位のものであらう。しかし、幼兒教育に就ては、此の考へ方が可なり行き亘つて考へられて居る。讀み方によつてはフレイベルの言葉の中に既に此の意味がある。ルソーの影響を強く受けて居る、近世の自由遊戯主義保育

論などの中には、一層此の考へが多くあらはれて居る。

吾人は、此の種の考へ、即ち、教育の消極的態度の中に、ある大きな真理の一面が含まれて居ることを見る。殊に教育の實際上此の反對の弊害に對する反動的氣分、乃至或る警戒の意味に於て、大に此の種の考へ方に尊重の意を感ずる。かくて、吾人は、今も、否、何時迄も、深き尊敬と沈潜の心を以てルソーを讀む。しかし、消極的教育はそれだけで教育の完き姿ではない。

幼稚園と子供の自由な遊び場、幼稚園教育者と心なき子守達。之等の對立の間には、實に深い差別があり、相違がある。それは、幼稚園は、たゞ子供を遊ばせる處でなくして、教育をする處である。幼稚園教育者は、たゞ子供の無害な相手たるに止まらずして、教育をする者である。すなはち、

それが教育であり、教育者である限り、いふまでもなく其の目的に積極性を有するものである。其の効果を積極的効果を期するものである。幼稚園は假令方法に於て或る消極的態度をとるの要ありとするも、教育であること夫れ自身が、積極的なものである。

我國の幼稚園の歴史は、初めに、教へ過ぎる幼稚園があつた。その弊に對して、次に極端な消極的幼稚園が續いた。その中には、無能も混じた。怠惰も混じた。而して、終には、幼稚園教育者自ら自分のして居ることに、何の積極的信念も、意氣も、徹底も有しない様にさへなることもあつた。或るものは言ふ。間違ひのない様に、あたらずさはらず打ち捨て、おきます。或るものは言ふ。計畫なんぞ立てません。或るものは言ふ。幼稚園は子供に別段何にもする處じやありません。斯くて、意味の深い、實に深いルソーやフレーベルの考へが、淺薄な無思慮な、更に時には無責任な放任と混同される。而して、幼稚園教育の存在の意義が、他から疑はれ又自分にさへも疑はれる。

吾人は、兒童の天賦の自然の發達性を信ずる。之れを尊重し、又之れに信頼する。しかし、同時に、我が教育を信じなければならぬ。之れを尊重し、之れに信頼しなければならぬ。そこに、吾人の幼稚園が、存在の意義と職能とを有つ。

幼稚園は、それが幼兒に與へ得べき教育の一歩を行ふものでなければならぬ。幼兒の爲に必要にして可能なる計畫の一つをだも怠つてはならない。その教育は、どこ迄も幼兒の爲に積極性を有するものでなければならぬ。此の責任と自信とを缺いで、吾人の幼稚園に何の努力があらう。何の工夫があらう。何の失敗と歡喜とがあらう。何の生命があらう。

但し、幼稚園の積極性が、其の内容と程度とに於て、幼兒教育としての正當なる限度をもつことはいふまでもない。併し、吾人は、此の限度を守ることと幼稚園教育の積極性を失することとを混同してはならない。寧ろ幼稚園の積極性に對する強き信念があつて、而して後、此の限度の顧慮と研究とが起るのである。